

中山さんと私

進藤, 誠一

<https://doi.org/10.15017/2332853>

出版情報 : 文學研究. 57, pp.5-7, 1958-03-20. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

中山さんと私

進藤誠 一

中山さんと私との関係は、昭和三年の四月に私が九大法文学部に講師として着任したときに始まる。中山さんはその前の年の秋に同じ法文学部に赴任して来てをられたのだ。だから九大に関する限り、中山さんは私より六ヶ月ほど先輩である。中山さんは英文学、私には仏文学で、言わばお隣り同志の講座に属していたのだが、お互い助教授や講師であり、その頃は教授会には教授以外のものは出ないことになっていた。私は着任してもすぐに中山さんと交際を始めたわけではなかった。

巴里時代に御懇意に願った美学の植田寿藏先生が殆んどただ一人の知人であった。その植田さんに紹介されて竹岡勝也さんを知り、しきりに竹岡さんの家に遊びに行っているうちに、そのお隣りに住んでをられた中山さんとも次第に懇意になり、お互いに行き来をするようになった。その頃竹岡、中山両家は浜田町にあり、私の家は浪人谷にあつた。私が浪人谷に居を定めたのは昭和三年の暮れだから、中山さんとの交遊の始まつたのは、福岡に来て一年くらい経つた頃であつたらう。そのとき竹岡さんと中山さんは三十五歳、私は三十一歳、もうひとりの友人佐藤通次さんは二十八歳であつた。佐藤さんは少壮気鋭の独文学者であつた。こうして英独仏の若手の三人が国史の竹岡さん（その頃は助教授だつた）を囲んで、よく談論し、またよく飲んだ。お互いの家を廻りもちでよく飲んだので、奥さんたちや子供衆とも親しくなつた。のちには中洲あたりまで羽をのばして飲むようにもなつた。四人とも酒量はほぼ同じであつたが、中山さんは時として急に酔を発して、平素と異つた奇行を演ずることがあつた。例えば蜜柑を買いこんで、道ゆく人に一箇つつ進呈したり、あるいは中洲の通りで大手をひろげて自動車を止めたりした。そんなとき、あとは人事不省におちいるのであり、お宅まで私たちが自動車で運ばねばならなかつた。当然のことながら、奥さんの御機嫌ははなはだ悪く、これはど酩酊するまえにどうして止めてくれなかつたかという嫌味も幾分もれるというわけで、恐縮して退却しながらも、心ひそかに割りのわるい友人の役を敷じたことも

あつた。

談論の方では皇道主義の佐藤さんと、リベリズムの中山さんとの激論が一番印象に残っている。私もリベリズムの味方ではあつたが、中山さんほどむきになれない猾きがあつた。竹岡さんといえば、両者の議論の技術を批判するという態度だつた。時には酒の勢いも加わつて喧嘩になることもあつたが、翌日はまたもとの通りの仲間であつた。楽しい思い出である。

私は中山さんにはいろいろの趣味の手引きを受けた。園芸、釣り、庭球、謡曲などである。これらの遊びはいずれも中山さんがまず取りついて、次に私をひき入れたのであり、のちには私の方が熱をあげたものもある。釣りだけはどうしても、中山さんほどの熱意と熟練に達することができなかつた。庭球は軟球も硬球もやり、一時はぜひぶん熱をあげたが、二人ともに運動神経が鈍く、ついに兄たり難く弟たり難しの程度で、中山さんが四十腕（神経痛）でサーヴィスがでなくなつたのを機会に、私はゴルフに転向してしまつた。謡曲は中山さんが藏内教太さんに手ほどきを受けることになつた際、一人では教えにくいから一緒に習つてくれぬかと、藏内さんがじきじきに私の宅まで来ての懇請があつたので、御学友として参加したのである。一週一度藏内家に参上して、一時間ほど観世流謡曲の稽古をすると、あとは奥さんのお手料理で一献いただくというのが例であつた。この稽古後の一献にひかれて、はるばる浄水通の藏内邸まで通つたのは浅ましい次第だが、そのうち私は謡曲に病みつき、中山さんよりむしろ熱が高くなつてしまつた。伎倆においても私の方が一段うえであることは、衆目の認めるところである。私たちの謡曲熱は十年ほど続いた。私は胸を病んでから稽古をやめたが、謡曲を教つたことはいろんな意味でよかつたと思つている。中山さんと藏内さんに感謝しなければならない。

戦争中は誰もそれぞれに苦しんだが、私としては苦しみは戦後の方が大きく、苦しみの性質も戦後の方が味が多かつた。佐藤通次さんは戦争中すでに九大を去られたが、竹岡、藏内の両先輩は戦後の混乱、動揺の中で九大から身をひかれた。これは中山さんにして私にしても、実につらい、悲しい出来事であつた。長いあいだ部屋住みで、責任の軽い地位にいた中山さんも私も、戦後ついに講座担任者となり、その後は学部のために協力して働くということも多くなつた。

いつたい中山さんは六十歳になつたら後進に途をゆずつて引退するという決意を早くからもつてをられたのだが、六十に近くなられた頃、学部の事情が中山さんに学部長の職を押しつけ、続いて学術会議会員にしてみました。そのために中山さんはとうとう心ならずも六十三歳まで九大に留まられることになつたのである。しかもこの間の事情には私の一身上の都合が影響をおよぼしていることもあ

るので、特に私は中山さんに相済まなく思っているのである。

九州文学会というものは昭和六年に法文学部の中の国文学、支那文学、梵文学、英文学、独文学、仏文学、言語学の教官を委員として創立され、昭和七年三月に「文学研究」第一輯を発行した。その時の委員の顔ぶれを見ると、春日政治、片山正雄、小島吉雄、中山竹二郎、成瀬正一、小野島行忍、進藤誠一、佐藤通次、須川弥作、豊田実、山内晋卿、吉町義雄（ABC順）の十二名である。それ以来二十六年に近い年月が過ぎた。「文学研究」もついに五十六輯におよんだ。右の委員のうち五人の方々がすでに他界されている。もちろん、その後多くの先輩や同僚を迎えたが、最初からいるものとして、最後に残った三人のうち、中山さんを昨春送り出したので、あとは吉町義雄さんと私との二人きりになってしまった。「文学研究」は若い私たちのためには絶好の修煉道場であつた。しかもそこでは教授も助教授も講師も、老いも若きも、まったく同等の待遇をうけた。いやむしろ若いものほど優遇され、奨励されたと言つてよいであらう。その点当時の先輩教授がたの民主的精神に感謝を捧げなくてはならない。中山、佐藤両氏と私とは「文学研究」を道場として、若干の競争意識ももつて、はげみあつたものである。学部の行政のことも知らず、総長がどんな人であるといつたことにも無関心でのんきに勉強させてもらい、遊ばせてもらったあの時代は、良い時代であつた。

永いあいだ末輩だ、部屋住みだと思ふ癖がついて暮してきたが、気がついてみるといつのまにか年寄り組になり、停年に近くなつてしまつてゐる。中山さんを送り、記念事業などをするにつけて、愈々自分の順が近くなつたことを痛感する。ラ・ロシュフコーが「人間は何歳になつても、そのとき味わう気もちは初めての経験だ」という意味のことを「箴言集」の中で言つてゐるが、今の私の気もちは私自身にとつて実に目あたらしいものではあるが、同時にすべての先人がこれを味わつたに違ひないと思われる。その意味ではまことに月並みな、当然な気もちでもある。中山さんは我孫子のお家も漸く完成し、これからは何物にも屈われず英文学三昧の境地を楽しまれることであらう。まことに羨ましい限りである。私も何とかしてあやかりたいものと願つてゐる。